

石川 哲先生とのお別れを悼む

日本臨床環境医学会顧問（北里大学名誉教授）
相澤 好治

石川 哲日本臨床環境医学会初代理事長が令和4年5月18日に89歳でご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。その約1か月後の6月25日と26日に第30回学術総会が柳宇会長の下、西新宿で開催されました。その一日目に「日本臨床環境医学会の歩み」という題で特別講演を依頼されていた筆者は、石川先生の遺された文章を読んでいましたので、思い出を語るスライドをできるだけ多く加えました。

石川先生から声をかけて頂いたのは、筆者が北里大学医学部に奉職して衛生学公衆衛生学の助教授をしている1987年頃だったと思います。当時呼吸器疾患を中心に職業病を勉強しており、前職では内科臨床をしていたので、声を掛けやすかったのでしょう。日本眼科医会でVDT作業の健康影響を検討しているの、加わらないかとお言葉でした。指導教授の高田 勗先生の許可もおりたので、数年間研究会に参加し発表する機会を与えて頂きました。石川先生は饒舌で英語を交えながら会を上手に引っ張って行き、お忙しいのに懇親会でも周囲を和ませておられました。

高田教授が定年退職後、後任の教授選考が始まり、石川先生も選考委員のお一人で面接も受けました。別のところで「君は内科の業績はあるが、衛生学の英文業績が少ない、VDT症候群の論文を作りなさい」と指導され、書き始めましたが、残念ながら間に合いませんでした。それでも幸い1994年4月に教授に昇進させていただきました。同じ年の7月に石川先生は医学部長に就任され、筆者は医学部ニュースの編集委員長に任ぜられました。初仕事は英会話を学生に教えていた米軍座間基地の二人の奥様中心に医学生の英語教育をテーマとする座談会でした。特別号で英文掲載して翻訳版も作りました。後で考えると英語力を試されていたのかと思います。医学部長として石川先生は、臨床系研究室の改善に尽力され、基礎医学系と同居のような形から独立して研究ができるような体制に改革されました。

その後、日本臨床環境医学会に演題を出してはと勧められ、第2回学術総会から演題発表をさせていただきました。教室の若い人も初夏の北海道を楽しめるので競って参加してくれました。シックハウス症候群や化学物質過敏症の臨床研究も勧められ、坂部 貢現学会理事長がセンター長をしていた北里研究所病院の環境医学センターで月1回診療もさせて頂き、悩んでいる方の実態を知ることができました。石川先生が主任研究者をされていたシックハウス症候群の厚生労働科学研究班にも入れて頂き、2007年からは継承させていただきました。

ゴルフに何回か誘って頂き、チェロも聞かせて頂きました。生活を楽しむ人のようですが、実は農薬散布による慢性中毒や化学物質過敏症では、反動勢力と正面からぶつかりながら成果を挙げた闘士であることもわかりました。反骨と開拓の精神に加えて調和力が先生の力の素ではないかと思います。第30回の学会会場で講演を聞いていると、石川先生が笑顔で登場されるような錯覚を感じました。偉大な臨床環境医学者であられた石川先生の創った学会の益々のご発展を祈ります。石川先生、ご指導誠にありがとうございました。合掌